



建学の精神

キリスト教に基づく「神を愛し、人を愛し、土を愛する」三愛精神に徹した人間教育により、健全にして良識ある社会人の育成、豊かな情操と国際的な視野を養い、三愛精神の実践者の育成に努めます。

創立者 黒澤西蔵が唱えた健士健民の思想および学理に基づく実学教育により、農業および農業人のあり方を体得した、創造的で実践的な人材の育成に努めます。

酪農を中心とした農学・食品科学・経済学・獣医学・食品流通学・環境システムの研究・教育により、日本農業、食糧事情など環境保全を視座に究明し、その発展に努めます。



酪農学園 校章・マーク
左から、とわの森三愛高等学校と酪農学園大学のマーク。大学のマークの八角形の外枠は、タワーサイロをイメージしています。

学校法人 酪農学園

〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地

TEL：011-386-1111(代) FAX：011-386-1214



創立

黒澤西蔵は、茨城県の水戸学のお膝元、西山郷のほど近くに生まれ育ちました。東京に出て書生として学んだときに、田中正造の足尾鉍毒事件を知り、海老瀬村や谷中村の荒れ果てた農地を見て、国土の大切さに目覚めました。黒澤に大きな影響を与えた田中は、「強兵よりも治山治水をやらなくてはダメだ。国土の尊厳を知らなくては国はダメになる」と諭しました。

母が亡くなり、弟妹を養うことになった黒澤は、北海道で農業をやることを決心しました。アメリカ・ウィスコンシン州立大学にも学んだ酪農家 宇都宮仙太郎から、酪農の優れた特性を聞き、牧夫となります。

兵役終了後に独立を果たした黒澤は、再び渡米した宇都宮の話から、酪農先進国デンマークの存在を知りました。「デンマークは北欧の一小国に過ぎず、面積もウィスコンシン州の4分の1に過ぎない。土地も痩せているにもかかわらず、農民は豊かで文化の程度も高く、組合の発達していることは世界一である」と聞き、以来、黒澤はデンマークへの知識を深めます。デンマークが理想郷になった原因は、キリスト教会牧師で国民高等学校という社会人学校を提唱したN・F・S・グルンドビー(1783～1872年)の三愛精神にあるということがわかりました。三愛精神とは、キリスト教に基づく「神を愛し、人を愛し、土を愛する」ことです。

宮尾舜治 北海道庁長官に、デンマーク方式による北海道農業の振興を提言したことから、1922年(大正11)デンマークの農家5戸が、北海道に指導にやってきました。アメリカ式の粗放経営からデンマークや西ドイツ(当時)式の集約的な有畜農業への転換が進められましたが、宮尾が関東大震災の復興のために当時、帝都復興院総裁だった後藤新平によって呼び戻されると「北海道をデンマークに」という運動は停滞してしまいました。追い討ちをかけたのは、関東大震災の海外からの見舞い品に端を発した、乳製品の輸入自由化です。黒澤たちは対抗手段として、売り先のない牛乳を買い取って、加工、販売する北海道製酪販売組合、略称〈酪連〉を1925年(大正14)に立ち上げました。酪農学園の母体である北海道酪農義塾は、この〈酪連〉から生まれた学校です。

創立の背景と歴史

黒澤西蔵は、茨城県久慈郡世矢村(現・常陸太田市)に生まれました。4年間の義務教育である尋常小学校卒業後、水戸学のお膝元だったこともあり、涯水義塾という漢学塾に通います。14歳のときに、もっと勉強しなくてはと一念発起してお金を貯め、東京へ行きました。神田数学院という私塾で学僕になり、のちに教授の書生となって英語は正則英語学校、数学は神田数学院で学びます。

海軍兵学校を受験するも身体検査で不合格となりましたが、ちょうどそのころ田中正造が明治天皇に直訴した足尾鉍毒事件を知り、のちの人生が方向づけられました。田中の元を訪ねた黒澤に、「学生の現地視察団を募集しているので、一緒に行くように」と田中は勧めます。この視察団には内村鑑三をはじめとし、学生だけでも1500～1600人参加したといえます。以来、黒澤は鉍毒反対運動に加わり、田中の秘書としても働きました。キリスト教との出会いは、鉍毒反対運動中に逮捕され、未決囚として収監中、田中の知人の潮田千勢子から差し入れられた1冊の聖書でした。今村力三郎という有力弁護士尽力で無罪となり、当時籍のあった旧制京北中学校に復学。田中の援助で勉学を続け、卒業します。卒業直前、母が死去したことで、幼い弟妹を養うために働くこととなり、1905年(明治38)北海道に渡って、宇都宮仙太郎牧場の牧夫となりました。

兵役を終えた後、1909年(明治42)には札幌のメソジスト教会で洗礼を受け、同年、宇都宮から独立して酪農家になります。しかし関東大震災の援助物資を非課税化するために乳製品の輸入が自由化されると、牛乳が買い叩かれるようになってしまいました。1925年(大正14)宇都宮を含む他の酪農家とともに北海道製酪販売組合(旧・雪印の母体)を設立し、専務となります。戦後、雪印が株式会社として発足すると相談役に就任しました。

このような経験を重ねた黒澤が学校の設立を志したのは、農民の生活安定のためには、農民自身の自覚を高め、腕を上達させる以外にないと考えてのことです。特に北海道の酪農界草創期には、農民自身が目先の利益に踊らされて結束を破るような行動が何度か見られたからです。そこで協同主義の酪農事業とともに、酪農教育に一生を捧げようと決心しました。1933年(昭和8)、農民精神の作興、酪農経営の実地教育、産業組合主義の徹底の三つを旗印に、北海道酪農義塾が開学。黒澤は塾長に就任します。経営は社団法人組織で、〈酪連〉からの交付金と会員からの寄付、職員と塾生の農場収入でまかない、学費を取りませんでした。

北海道酪農義塾はその後、野幌機農学校などを経て、〈とわの森三愛女子高等学校〉と統合し、1991年(平成3)〈とわの森三愛高等学校〉になりました。大学部は1949年(昭和24)各種学校として始まり、学校法人としては1960年(昭和35)に酪農学部酪農学科を開学しています。

酪農学園は普通の学校とは違います。普通の農学校とも違う、と黒澤は言いました。酪農学園は、農村に入り、自ら土と取り組む人材を育成することを目的としています。その教育の根底には、「続ければ続けるほど土地を肥やし、作物と家畜も良く育つ農業」である酪農に、科学的かつ実践的に取り組もうという気概があります。



創立者 黒澤西蔵(1885～1982年)
北海道を東洋のデンマークに、と夢の実現に努力しました。

